

# 塗り薬って、

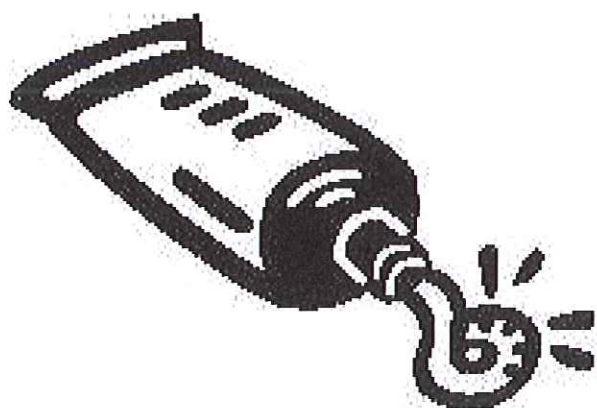
# 知得ページ

## どう使うの??

今回はみなさんもよく使われている塗り薬について簡単にご説明します。  
すべての塗り薬は主成分と基剤が組み合わせられて作られています。

主成分としては・・・

1. ステロイド剤 (かゆみや炎症を鎮める)
2. 非ステロイド系抗炎症剤 (痛みを抑える)
3. 保湿剤 (皮膚をしっとりさせる)
4. 止痒剤 (かゆみを止める)
5. 抗菌剤 (いわゆる抗生物質)
6. 抗真菌剤 (水虫の薬)
7. 抗ウイルス剤循環改善剤 (血行を良くする)
8. ビタミン D3 剤 (乾癬治療薬)
9. 免疫抑制剤 (アトピー性皮膚炎治療薬)



……などがあげられます。また、基剤としては、軟膏、クリーム、ローション、テープ、ゲル、スプレーなどがあります。

各主成分が、数種類の基剤と混ぜ合わせて作られており、例えばステロイド系では、軟膏、クリーム、ローション、テープがあり、ステロイドの主成分自体にも効果の弱いものから非常に強いものまであります。

ステロイドの塗り薬というと、すべて同じように考えて、敬遠する方がおられますが、医師の管理の下、使用部位や皮膚の状態によって使い分ければ副作用を出さずに皮膚病を改善させることができます。

これらの基剤の中で最も主成分の効果が安定するのは軟膏です。その他のクリーム、ローションなどは頭部や、軟膏ではべたついて生活上支障をきたすような場合に、テープは局所に強い炎症がある場合に使います。

非ステロイド系の塗り薬は、ステロイドではない抗炎症剤ということで気軽に使われることがあります。かぶれを起こしやすく、症状をかえって悪化させることもあるため、安易に塗り続けられないよう充分注意する必要があります。医師の指示に従ってください。

## さて、実際の塗り方ですが、

1. 必ず患部のみに塗って、必要のない部位には付けないように注意しましょう。また、良くなっても医師の指示があるうちは自己判断で止めないようにしましょう。
2. ステロイド系の塗り薬、止痒剤、抗菌剤は患部を洗ったあとに伸ばすようにやさしく塗りましょう。塗りこむと患部に刺激を与え、傷をつけてしまいかえって悪化することがあります。
3. 保湿剤は、白色・サリチル酸ワセリンのようにべたつくものは最も皮膚が乾燥する入浴直後や寝る前に、その他のクリームやローションは日中、気付いた時に適宜、1～2時間ごとに何度でもつけると効果が上がります。なお、クリームやローションの保湿剤は傷がある部分につけるとヒリヒリすることや、病変が悪化することがあります。
4. 頭部に塗る際には、髪の毛を避けて、地肌に直接つけましょう。自分では塗りにくいので、他の人に塗ってもらうことが望ましいです。ローションは垂れてきて目に入らないように気をつけてください。
5. 2種類の塗り薬をつけるように指示があった際には、最初につける薬を患部に直接つけて、もう1つの塗り薬はガーゼ等に厚めに伸ばして貼ると衣類に付くことが無く、効果も上がるといわれています。
6. 抗菌剤は患部を消毒後、塗ると効果的です。
7. 抗真菌剤、抗ウイルス剤は種類によって異なりますが、基本的に1～2回塗ることが好ましく、それ以上つけると病変を悪化させることがありますので注意が必要です。
8. ビタミンD3剤(乾癬治療薬)や免疫抑制剤(アトピー性皮膚炎治療薬)は、特殊な薬ですが、注意点を守って使えば副作用も少なく、長期に塗るには好ましい薬です。ビタミンD3剤は、ステロイド剤と混ぜ合わせることでより効果を上げることができます。また、カルシウム剤の飲み薬との併用はできませんので注意しましょう。免疫抑制剤は、最初は刺激やほてりを感じることも多く、少しの範囲から始めて、徐々に塗る範囲を広げて皮膚に慣らしていくとよいでしょう。このような使い方であればアトピーによる顔の赤みを劇的に改善させることもできます。なお、傷がある部位には使えませんので注意が必要です。
9. 基本的に塗り薬は妊娠中でも、適量であれば問題はありませんが、中には妊娠中は使用できないものもあります。妊娠を計画する場合には、医師に相談しましょう。

塗り薬といっても、そのヒトのそのときの状態に合わせて処方されているため、他人に譲渡することはもちろんですが、置いておいて自己判断で勝手に使わないことが大切です。

文責 濱田美保

